

関係修復と物語実践

認知的共感とラディカル・オーラル・ヒストリーを中心とした考察

大津留香織（北九州市立大学）

発表者はこれまで人間社会のミクロ・コンフリクト後の関係修復について、人類学研究と法学研究を足がかりに、バヌアツ共和国でフィールドワークをおこなってきた。コンフリクトに際して人々は、確かな「事実」や「真実」を求める。しかし実際に得るのは「事実」そのものとは距離を置いた「現実」、そしてそこから発露し共有・分有されるいくつもの葛藤の「物語」であった。実際のコンフリクトの現場では、将来の関係性が続していくことを前提として、それぞれの当事者や協議参加メンバーが、「事実」に基づきながらも「誤謬」や「仮構」をも含む「物語」を作り、出来事に意味づけをおこなうことによって納得を引き出し、関係修復へと導いていた。一方、関係性が続かないことで破綻した修復もあった。つまり関係修復に必要であるのは、取り決めの内容だけでなく、「物語」作りのプロセスに参加すること、そして「物語」が状況によってメンテナスされ、書き換えられ続けることであった。本発表ではこのような取り組みを「物語実践」と呼びたい。

物語と共感

そもそも「物語」が関係修復の重要なタームとして機能するのは、人間に共感能力が備わることと関係する。進化心理学の共感の議論から、ここでは他者の感情に同期する情動的共感ではなく、他者の認識を推測できる認知的共感の能力に着目したい。コンフリクトの「物語」形成では、読み読まれるという高次な意識水準の存在が前提となっており、「物語」の形成は一方通行ではなく、常に書き手と読み手とが交互に入れ替わりながら創造されるものである。人々はそのプロセスのなかで納得をもたらす「物語」を模索し、その「物語」が「現実」となるように実践する。そしてこのプロセスを、被害者対加害者という閉塞的な関係性の中に押し込むのではなく、当事者と将来の関係を持ち続ける人々も担うことで、相互に持続的な納得がもたらされる。つまり「物語」と「物語実践」は法的枠組みに沿うかどうかではなく、認知的共感を前提とした共同体の応答性に左右されるものなのである。

このような「物語」の性質と共同体の議論から、関係修復についての新しいモデルを導くことができる。それは「物語」の性質と扱われ方、共同体、そして持続可能な納得の体系を考慮しているという点で、これ

まで考えられていた和解や関係修復とは大きく異なる。すなわち合意や擦り合わせによって、たったひとつの確かな「物語」が作られるというよりは、実際には共同体の関係性を考慮しながら幾つもの「物語」が並存しているという状態なのである。矛盾する「物語」がいくつもあるという場合には、歴史人類学者の保苅実が述べるように、「ギャップごとのコミュニケーション」でありながらも、互いの経験の間にある「接続可能性」や「共奏可能性」について一緒に考える〔保苅 2004: 26-27〕ことが、共に生きていくために必要となってくる。

物語実践と法的枠組み

法的枠組みの研究から考えてみると、この「物語実践」は、保苅の歴史実践の議論とパラレルな関係性にある。歴史学における史実主義者たちは、ローカルな人々の語りを尊重しながらも、歴史の議論からは排除してきた。同じように、国家司法の専門家たちはコンフリクトの当事者や関係者たちの語りのうち、国家法規の枠組みから外れたものは排除してきたといえる。関係修復にとって重要なのは、他者の「物語」を解体し、「(法的枠組み内の)事実」かどうかを精査することではなく、他者の「物語」を真摯に聞く姿勢である。そして法専門家自らが提出する「物語」もまた、当事者たちの「物語」に影響し、時には修復を阻害することさえあるということも見逃してはならない。

一方で、「物語」といった主観的な要素を前提とした修復的アプローチが起こす危険性は、かねてより指摘されてきた。特に、大規模な都市社会において「事実」無根の「虚偽」や「幻想」が一瞬で広まってしまうことは、むしろ新しい脅威として捉え直し、取り組んでいかなければならない問題である。

【参考文献】

- 大津留香織 2017『重奏する物語実践による関係修復の可能性 バヌアツ共和国エロマンガ島を中心とした RJ に関する人類学研究』学位請求論文
保苅実 2004『ラディカル・オーラル・ヒストリー オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』 お茶の水書房

キーワード：葛藤解決、修復的司法、オルタナティブ・ジャスティス、法的多元性